

ウラナミシジミのP R A報告書

平成 22 年 11 月

横浜植物防疫所

ステージ1：ウラナミシジミに関する有害動植物危険度解析の開始

1-1 開始：(開始するに至った問題の本質、目的)

ウラナミシジミは現在検疫有害動植物として取り扱われているが、検疫有害動植物については、平成16年5月21日に公表された「植物検疫に関する研究会報告書」で「検疫有害動植物については、輸入植物の用途や輸送形態も考慮し、可能な限りリスクの定量的な評価を含めて、適時適切なPRA(有害動植物危険度解析)を実施し、それぞれのリスクに応じた措置となるよう検証し、対応していくことが適当。」とされた。

このため、ウラナミシジミの有害動植物危険度解析を見直すこととした。

1-2 有害動植物危険度解析地域の特定

日本全域と特定する。

1-3 対象となる経路及び潜在的検疫有害動植物

1-3-1 経路

ウラナミシジミが発生する地域から輸入される寄主植物を経路と特定する。

1-3-2 潜在的検疫有害動植物

ウラナミシジミ(学名：*Lampides boeticus* (Linnaeus))を潜在的検疫有害動植物と特定する。

1-4 情報

生物学的な情報は、別紙のとおり。

1-5 開始の結論

検疫有害動植物の取り扱いについては、「植物検疫に関する研究会報告書」において、付着する植物の用途や輸送形態を考慮しつつ、随時適切な有害動植物危険度解析を実施する旨の指摘があったことから、有害動植物危険度解析を実施する必要性が生じた。

本種を潜在的検疫有害動植物と特定し、また、本種の発生国の寄主植物を経路と特定し、我が国全域を対象として、植物検疫措置に関する国際基準 No. 11「検疫有害動植物のための有害動植物危険度解析」(以下「国際基準」という。)に基づき、有害動植物危険度解析を開始する。

第2章 ステージ2：有害動植物危険度評価

2-1 植物検疫上の取り扱いに影響するウラナミシジミの特性等

2-1-1 系統

系統に関する情報は見つからなかった。

2-1-2 未発生有害植物のベクター

ベクターとなることに関する情報は見つからなかった。

2-1-3 日本での分布状況及び公的防除の有無

ウラナミシジミは、房総半島南部以南、四国、九州、南西諸島に分布している。

本種は、公的防除の対象ではない。

2-1の結論

ウラナミシジミは、房総半島南部以南、四国、九州、南西諸島に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。よって、有害動植物危険度解析は中止する。

和名	名	ウラナミシジミ ¹⁾
学名	名	<i>Lampides boeticus</i> (Linnaeus)
英名	名	pea blue butterfly、lucerne blue ^{1), 2)}
分類	類	チョウ目 (LEPIDOPTERA) ¹⁾ シジミチョウ科 (LYCAENIDAE) ¹⁾

分 布 : (日本) 房総半島南部以南、四国、九州、南西諸島^{3), 4)}
(世界) アフリカ、ヨーロッパ、アジアの熱帯～亜熱帯およびオーストラリアやハワイ諸島⁴⁾

寄主植物 : いんげんまめ、あずき、ささげ、えんどう、そらまめ^{1), 4)}、まめ科牧草¹⁾

形態・生態 : 成虫の前翅長は 17mm 内外で体は紫黒色、雄の翅の表は光沢のある藍紫色で外縁は細く黒褐色に縁取られるが、雌は外縁の縁取りが幅広く黒褐色となる。翅裏は黄褐色で白灰色のさざ波紋が走る。卵は淡黄色のまんじゅう形で表面に放射刻紋がある。老熟幼虫の体長は 15mm 内外で長楕円、平たいワラジムシ形で暗緑色～緑褐色、蛹の体長は 7～8 mm となる。越冬地域での発生回数は 6、7 回。気温の上昇とともに北へ移動して分布を広げ、加害も見られるが越冬はできない。卵は花、蕾、新芽などに 1 卵ずつ産下される。卵期は 4～5 日。幼虫期間は 15 日内外、4 齢を經過して食草の葉間や物陰、地表のくぼみなどで蛹化する。蛹期は 7 日内外、越冬期の場合は 2 か月に及ぶこともある。⁴⁾

被 害 : 栽培マメ類の害虫として著名。若齢幼虫は花蕾や花芯を食害し、やがて莢内に食入するため、幼莢で落下したり不稔実や傷果となって減収につながる。とくに成虫の発生期と開花期が一致する夏播き、年内収穫、次いで夏～初秋播き、晩秋～春収穫の場合の被害は大きい。⁴⁾

ベクター・
系 統 : 記述なし。^{2), 4)}

防 除 法 : あずき、えんどう、いんげんまめ、そらまめではウラナミシジミに対して登録農薬がある。⁵⁾ シルバーマルチを被覆することにより成虫の飛来を回避する方法がある。⁶⁾

文 献 : 1) 日本応用動物昆虫学会編(2006)農林有害動物・昆虫名鑑増補改訂版。日本応用動物昆虫学会。東京。日本。387pp.
2) CAB International(2007)Crop Protection Compendium 2007Edition. CAB International. Oxfordshire. UK.
3) 九州大学大学院農学研究院昆虫学教室編(1999)日本産昆虫目録データベース。九州大学大学院農学研究院昆虫学教室。福岡。日本。
(<http://konchudb.agr.agr.kyushu-u.ac.jp/mokuroku/index-j.html>)
4) 梅谷献二、岡田利承編(2003)日本農業害虫大事典。全国農村教育協会。東京。日本。1203pp.
5) 独立行政法人農薬検査所。農薬登録情報検索システム。農林水産消費安全技術センター。東京。日本。(<http://www.acis.famic.go.jp/>)
6) 梶原敏宏・梅谷献二・浅川勝編(1986)作物病虫害ハンドブック。養賢堂。東京。日本。1446pp.